

## Ⅱ. 国語科教育における授業研究

### —「読むこと」から「話すこと・聞くこと」「書くこと」へ—

望 月 謙 二

はじめに

京都市内の公立小学校における校内研修に参加させていただく機会があった。該当校は、一年間をとおして研究を継続し、その成果を年度末にA4判100頁程度の冊子にまとめている<sup>1</sup>。当該年度は、研究主題を「生きる 生かす 言語の力 ～言語活動を重視した授業の改善～」とし、国語・社会・算数・理科・音楽の5教科でプロジェクト研修会を結成、継続的な研究を実施していた。今回報告するのは、9月の取り組みの一部であり、「重点授業Ⅱ」として実施された国語の授業である。学習指導案と授業の様子を紹介した後、国語科教育研究の観点から考察を加えてみたい。

#### 一 学習指導案・公開授業の紹介

授業担当教員から示された学習指導案を以下に示す。内容はそのままだが、この論考の書式に合わせるため、□の大きさや数字の表記法、文字の大きさなどに修正を加えた。教材は、光村図書「国語 三上 わかば」に収録されている「海をかつとばせ」（山下明生 作・杉浦範茂 絵）である。

#### 国語科 学習指導案

3年〇組 指導者 〇〇 〇〇

- 1 日 時 平成〇〇年9月〇日（〇）〇校時
- 2 単元名 「読んで、考えたことを発表しよう 海をかつとばせ」
- 3 単元の目標
  - ①場面の変化に注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などを、叙述をもとに想像して読むことができるようにする。
  - ②文章を読んで感じたことを発表し、感じ方に違いがあることに気づくことができるようにする。

③条件に合わせて文章を書き、それを読み合っ、感想を述べ合うことができるようにする。

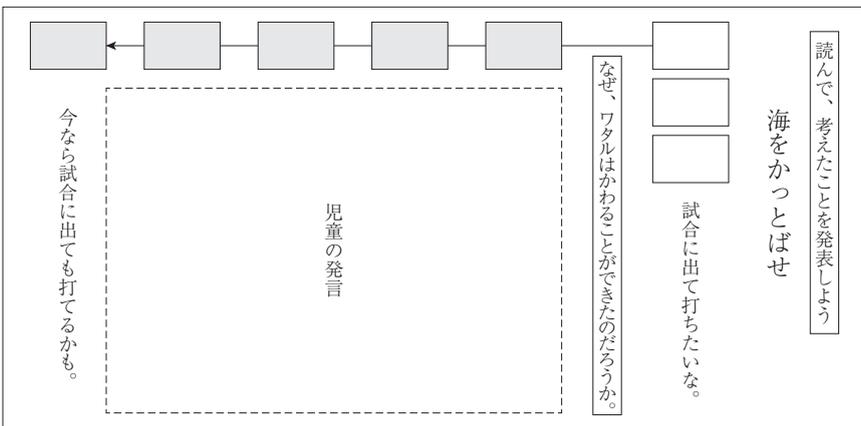
4 本時の目標 ワタルの行動・会話・気持ちを表す叙述をもとに、不思議な世界の山場について考えている。

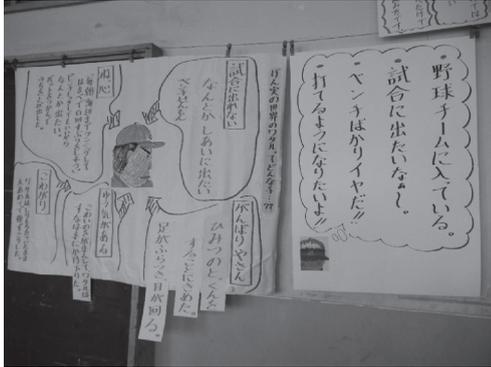
5 本時の展開 4/8時間

学習活動	主な発問 (○)・主な指示 (◇) ・予想される児童の反応 (・)	支援・留意点 (●)
1. 学習の見通しをもつ。  <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">意 欲</div>	◇今日は、不思議な世界のワタルについて学習をします。不思議な世界について書かれているところを音読しましょう。	●『現実』と『不思議』の世界について確認しておくことによって、意欲的に音読ができるようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 0 auto;">なぜワタルは変わることができたのだろうか。</div>		
2. 不思議な世界について一人読みを行う。  <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">方 法</div>	○ワタルが変わることになった一番の出来事(不思議な世界の山場)はどこか挿絵をもとに考えてみましょう。 ・僕は、『男の子と出会った挿絵』だと思います。なぜかという、男の子と出会っていなければワタルは変わることが出来なかったからです。 ・私は、『白いボールが次から次へととんでくる挿絵』だと思います。なぜかという、ワタルは自分が打てないことを忘れて夢中になって打とうとしているからです。 ・ほくは、『ワタルがホームランを打っている挿絵』です。周りからの応援がいっぱい聞こえていると思うからです。	●結末を想起することによって、どんなことがあったからその結末になったのかを考えることができるようにする。 ●不思議な世界の挿絵を山形に並べることによって、視覚的に不思議な世界の山場を捉えることができるようにする。 ●選んだ理由を一緒に書くことによって、根拠をもって考えることができるようにする。
3. 交流を行う。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">◇みなさんが考えた不思議な世界の山場を教えてください。</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">           ・ほくは、『男の子と出会った挿絵』だと思います。なぜかという、男の子と出会ったのでワタルが変われたと思うからです。         </div>	●全体交流の前に二人組で話し合う機会を設けることによって、全体交流で自信をもって話すことができるようにする。 ●選んだ挿絵が同じでも

<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">出会い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 僕も〜くんと同じで『男の子と出会った挿絵』だと思います。男の子が練習を手伝ってくれなかったらワタルは打つことが出来ないままだったと思うからです。</li> <li>• 私は、〇くんと違って『ワタルがホームランを打っている挿絵』です。観客の声援がワタルの力になったからだと思うからです。</li> </ul>	<p>理由が違う場合は発言するように促すことによって、様々な考えに触れることができるようにする。</p> <p>● 児童の発言を物語の流れに沿って板書することによって、学習後に見直すことができるようにする。</p>
<p>4. 学習のまとめを行う。</p>	<p style="text-align: center;"><b>【読む能力】</b></p> <p>行動、会話、気持ちを表す叙述に着目し、それらからワタルの気持ちの変化の発端を読み取っている。(ノート・発言)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今日のワタルに一言声をかけてあげましょう。</li> <li>• 小さな男の子に出会えたワタルくんはとってもうらやましいです。ほくも、小さな男の子に出会えたら野球がもっと上手くなるかもしれないな。</li> <li>• 次々にボールが飛んできたのに逃げずに練習できたワタルはすごいよね。</li> <li>• わたしならあんなにボールが飛んできたら逃げてしまうと思うよ。</li> </ul>	<p>● 友だちの意見を聞いて感想などを書くことによって、自分の考えと比べることができるようにする。</p>

6 板書計画





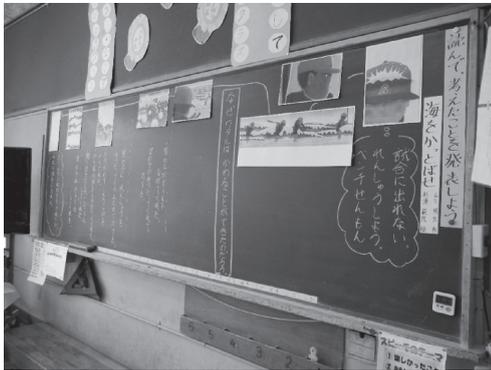
続いて学習指導案を補うために、公開授業時の写真を紹介しながら、実際の授業の補足説明をしておく。

左の写真は、教室の側面に貼られた掲示物である。これまでの授業で主人公ワタルの人物像を明確にしてきた様子が見える。「単元目標」の「①登場

人物の性格や気持ちの変化、情景などを、叙述をもとに想像して読むことができるようにする」を行うための前提ともなる学習が丁寧に実施されていたことがうかがわれた。本時の最初に、授業者はこの掲示物を利用して、これまでのふり返りを行っていた。

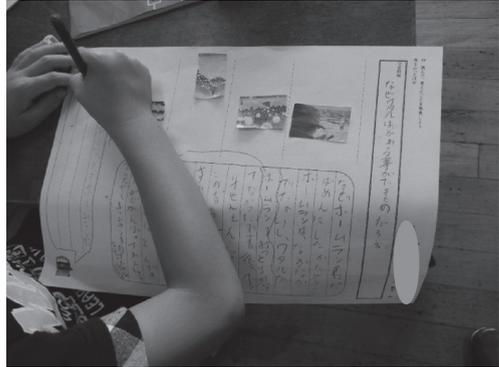
次に示す写真は、授業終了間近の板書の様子である。学習指導案の板書計画では分かりづらいが、教科書の挿絵を拡大コピーして用いている様子がよく分かる。場面ごとに掲載されている挿絵を黒板に張った上で、「本時の目標

ワタルの行動・会話・気持ちを表す叙述をもとに、不思議な世界の山場について考え」することを児童に求めたのである。一時間の授業で板書一面分という原則が守られているだけでなく、文字の大きさ美しさなどに気を配りつつ、全体の配置まで意識した優れた板書となっていることが分かる。



次に示す写真は、本時に使用した児童のワークシートを写したものである。児童には、板書に貼られた挿絵と同じものが一人ひとりに配布されていた。児童は、「山場」を考えるにあたり、挿絵を山形に置くように教員から指導されていた。この児童は、三つ目の場面を「山場」と考えていることがワークシートの上部の挿絵の配置から分かる。挿絵の下部分には、「なぜホームランを打

ったばめんにしたかと言うと……」とあり、根拠を明確にして自分の意見を書く学習が求められていることが分かる。ワークシートの右端には、単元名・教材名と記名する部分があり、それに続いて板書と同じように「学習課題」を書く部分が四角で示されている。ワークシート



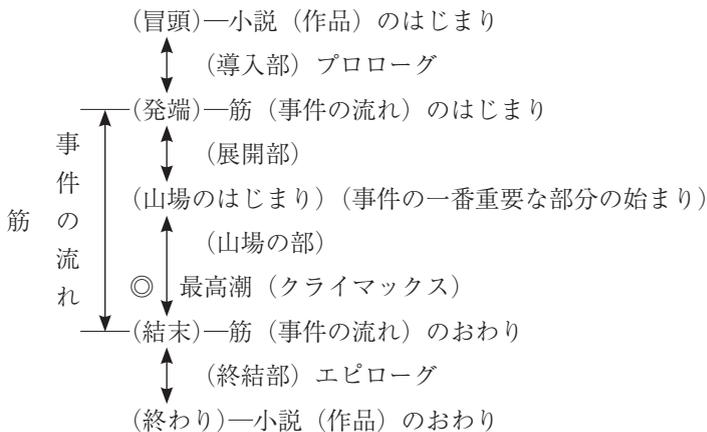
の中ほどは本時の学びを記入する部分であり、左端には本時の「学習のまとめ」として「今日のワタルに一言声をかけてあげましょう」を書く部分が用意されていた。

## 二 三領域一事項の指導を意識した授業

国語科教育における学習内容は、学習指導要領に示されている三領域一事項に大きな影響を受けている。三領域一事項とは、「話すこと・聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」・〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕であり、授業においては、すべてを総合的に学習するように求められている。紹介した実践においても、学習指導案の「3 単元の目標」に三領域を総合的に指導しようという指導者の姿勢が明確に表れている。具体的には、「①場面の変化に注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などを、叙述をもとに想像して読むことができるようにする」には「読むこと」が、「②文章を読んで感じたことを発表し、感じ方に違いがあることに気づくことができるようにする」「③条件に合わせて文章を書き、それを読み合って、感想を述べ合うことができるようにする」には「話すこと・聞くこと」「書くこと」が目標として設定されていると言ってよい。本実践の「単元の目標」は、言語活動の充実だけでなく、三領域を総合的に学習させようと意図したものなのである。それは、学習指導案の「支援・留意点」に担当教員が、「全体交流の前に二人組で話し合う機会を設けることによって、全体交流で自信をもって話すことができるようにする」「友だちの意見を聞いての感想などを書くことによって、自分の考えと比べることができるようにする」と記していることから明らかであろう。

### 三 習得すべき基礎・基本

本時における習得すべき基礎・基本の中から、物語教材における「山場」という概念に着目してみたい。今回の授業者は、「本時の目標」を「ワタルの行動・会話・気持ちを表す叙述をもとに、不思議な世界の山場について考えている」とし、児童を指導しているからだ。本来「山場」ということばは、科学的『読み』の授業研究会<sup>2</sup>の設立者である大西忠治が、国語科教育の世界に「構造読み」という概念を導入する中で主に用いられてきた。大西は、物語の構造を「導入部・展開部・山場の部・終結部」の4つに分けている。「構造読み」という理論の中で大西がまとめた「構造表」<sup>3</sup>を、以下に示す。なお、本論考の書式に合わせて改変した部分がある。



大西は、「冒頭・発端・山場のはじまり・最高潮(クライマックス)・結末・終わり」は、それぞれ本文の中のある部分(主に一文)に該当するとしている。つまり、大西の考え方によれば「山場の部」は「山場のはじまり」から「結末」までであり、その中に「最高潮(クライマックス)」があるとしているのである。今回の授業をふり返った時、授業者が児童に考えさせようとしていた「山場」は、大西の言う「山場の部」であったのか、「最高潮(クライマックス)」であったのか明確でない。挿絵は、ホームランを打った瞬間を表しているとしたならば、「最高潮(クライマックス)」にあたると言った方が妥当かもしれない。授業者に、「構造読み」についての認識があったならば、さらに、深い読解と豊

かな言語活動を促す授業が可能となっただろう。

また、科学的『読み』の授業研究会においては、「最高潮（クライマックス）」とは、「対立する二つの力の関係が逆転したところ<sup>4</sup>」であって、「会話部分が該当する時が多い<sup>5</sup>」といった指摘もなされている。やはり、「構造読み」に対する授業者の確かな認識が必要とされよう。

### おわりに

教育現場の研修会に参加させていただいていて、実践者と研究者の関係について考えさせられることも多い。現場の先生方は、日々の授業を良くするために熱心に研修を重ねている。その研修に研究者は、どのように関わっていけば良いのだろうか。まず研究者がなすべきことは、実践者の日々の実践を理論的に明確に意味づけることかもしれない。実践者は、学習指導要領や学習指導書などに記載されている指導内容・指導方法をもとに、日々授業を組み立てている。しかし、その指導内容・指導方法が、どのような理論的裏付けにもとづいているかまでは認識できていない場合が多い。研究者による助言が必要とされるところかもしれない。本論考においては、科学的『読み』の授業研究会の「構造読み」を紹介したが、他にも日本国語教育学会・日本文学協会国語教育学会・教育科学研究会・言語技術教育学会・文芸教育研究協議会など多くの学会・研究会の考え方が参考になる。国語科教育における様々な理論を実践者と研究者が共有しながら、共に、研修を継続していくべきなのであろう。

今後も、校内研修などに積極的に参加させていただきたいと考えている。

### 〈註〉

- 1 当該年度末に作成された冊子の中に、本論考で紹介する「海をかつとばせ」の授業のまとめも、授業担当教員によりなされていた。「第3学年：根拠を明確にして、自分の考えを話す」との章立ての中で、全8時間の授業の流れが紹介されている。
- 2 科学的『読み』の授業研究会は、現在、阿部昇を代表として、「夏の大会」「冬の研究会」など、幅広く活動している。詳細は研究会のホームページを参照されたい。
- 3 大西忠治（1990）「国語教育方法・授業定式としての『読み研』方式とは何か」大西忠治・科学的「読み」の授業研究会編集『国語教育評論10 「読み研」方式による授業入門』明治図書、13頁。なお、科学的『読み』の授業研究会では、大西の作成し

た構造表に手直しを加えて実践に用いながら研究を継続している。

- 4 科学的『読み』の授業研究会ではほぼ共通する考え方である。ここでは海崎義隆(1990)「『構造表』をどのように導入するか 小学校高学年 教材『注文の多い料理店』を例に」3と同じ、23頁から引用した。
- 5 科学的『読み』の授業研究会の「冬の研究会」に参加した時に、会員が参加者に用いた説明のことばである。先行文献における確認はできていない。

※ 本論考の掲載については、論考内で紹介した授業担当者の許可を得ている。